

# 先進事例 紹介

## 「大津版災害時ファーストコンタクト」を運用開始

～出火と余震による被害を防ぎ、助けられる命は今助ける～

滋賀県 大津市消防局

### 1 はじめに

大津市消防局では、災害の初期対応を担っていただく自主防災会に向けた訓練「大津版災害時ファーストコンタクト」～出火と余震による被害を防ぎ、助けられる命は今助ける～を考案しました。

大地震により倒壊家屋に要救助者がいることを想定し、駆けつけた住民が「二次災害は絶対に起こさない・起こさせない」という強い覚悟をチームとして持ち、危険排除・検索・重量物安定化など“安全管理の徹底”を図りながら活動する実災害をイメージできる内容としました。



地域の防災訓練で行われたファーストコンタクト

### 2 経緯

大津市は、自主防災会の活動を支援する目的で、平成24年度から防災士の養成事業に取り組み、5年間で559人の防災士を養成しました。

当消防局においても、平成25年度からこれら防災士に防災に関する知識等を伝えるフォローアップ研修を毎年行ってきましたが、消火、救急、水防などの限定的な訓練や研修を繰り返し実施してきたことから、参加者の減少が見られました。

また、平時の訓練において「一般市民に混じって訓練に参加しているだけで、指導に携わるでもなく我々は何をしたら良いのか分からない」と防災士から意見がありました。

こうしたことから、新たな訓練項目・手法を考案し、単に知識を防災士に伝えるだけでなく、指導力を持った防災士を育成することとしました。

さらに、実災害をイメージできる内容とすることで、災害現場活動に必要な目線を導入することとしました。

### 3 安全管理の目線を市民に伝える必要性

阪神・淡路大震災では、建築物などに閉じ込められた人のうち、生存して救出された約95%の方が自力又は家族や隣人などに助けられました。

このことから、災害発生時の地域住民による初動対応はとても重要と言えます。

しかも、その活動は余震の発生など、災害現場には多くの危険要因が在る中でのものとなります。

消防では当たり前とされている「安全管理」の目線は、活動する地域住民にも絶対に必要となります。

### 4 「大津版災害時ファーストコンタクト」の目的

#### (1) 共助体制の確立

「ファーストコンタクト」の名のとおり、地域の人々が最初の接触・情報交換・助け合いを始めるきっかけとなり、被災者への最初の救いの手を差し伸べる地域の力を備えていただくことが重要と考えました。

訓練を通じて感じていただく会話や連携、助け合いの大切さを確認し、地域における共助体制の確立につなげていくことを目的としています。

#### (2) 地震直後の出火を絶対に防ぐ

阪神・淡路大震災は293件、東日本大震災では111件の火災がそれぞれ発生しました。

地域を焼き尽くしてしまうような大火の発生だけは絶対に防がなくてはなりません。

地震直後の出火を防ぐ重要性を伝えることを目的としています。

#### (3) 二次的な被害の防止

救出活動中の二次的な被害を防ぐことを目的としています。

### 5 「大津版災害時ファーストコンタクト」の概要

#### (1) 倒壊家屋に要救助者がいることを想定した実災害対応型訓練

#### (2) チームとしての活動と安全管理の徹底

#### (3) 実施手法は、原則、JDR統一手法を基本

## 6 「大津版災害時ファーストコンタクト」の内容

### (1) 安全管理の徹底

大地震により倒壊家屋が発生、余震の発生が予想される中、地震によりダメージを受けた建物から人を救出するためには…



絵では、様々な活動が同時に進行しています。

では、どうして危険を察知するのでしょうか？

ファーストコンタクトでは、災害現場の危険を認識し、チームとして安全管理を実践します。

### (2) 服装

安全管理の基本は服装！

平時の訓練から、災害現場の活動に相応しい服装を着用します。

- ヘルメット
- 長袖シャツ、長ズボン
- 手袋
- 長靴等（できれば踏抜き処置がされているもの）



### (3) 危険要因の排除

災害発生後、第一優先の行動はガスの閉栓確認等の出火防止！

その他にも災害現場では、余震により転倒・倒壊してくるような柱や瓦礫、地面には割れたガラスなど危険なものがたくさんあります。

災害現場で活動するためには、これら危険要因の排除が欠かせません。

ゾーンニングで、安全管理の意識が特に必要な範囲を認識し、二次災害が発生しない活動を実践します。

### (4) 生存者を捜す要領

平成16年（2004年）に発生した新潟県中越地震では、崩落土砂に埋もれた車から当時2歳の男児が事故発生92時間後に無事救出されました。

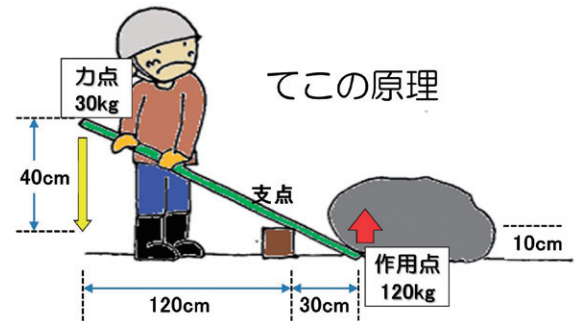
この際、救助隊員の会話や上空飛来したヘリコプターなどすべての雑音を排除（サイレントタイム）して、体力の弱っていた男児の出す僅かな音を頼りに活動できたことが、奇跡の救出につながりました。

このサイレントタイムを実際に体験いただくなど、検索活動の要領を実践します。

### (5) てこの原理による救出の要領

簡易な資器材であっても、誤った知識や操作で重大な事故につながります。重量物に挟まれた要救助者を

金てこ（長尺バール）と木片（クリブ）を使用して「てこの原理」による救出を実践します。



また、これらから地域が所有する他の防災資器材であっても、正しい使い方や習熟する必要があることに気付いていただきたいと考えています。

### (6) 負傷者の収容と搬送

負傷者を担架に収容する場面でも、危険な場所での活動であることをイメージし、担架を準備する位置など実践的な活動を行います。

## 7 おわりに

前述したとおり、「安全管理の徹底」は、災害現場で活動する我々消防職員にとっては当たり前のことです。では、そのことを災害発生時に活動いただく可能性のある住民の方々にしっかり伝えられているのでしょうか。

人は、危機に瀕すると「普段やっていることしか出来ない」「普段やっていることも満足に出来ない」「普段やっていないことは絶対に出来ない」と言われています。

自主防災の「自主」という言葉に甘えることなく、安全で実効性のある自主防災活動に導くことが、災害現場を知る我々消防職員の務めではないでしょうか。

## 8 概要動画

You Tubeチャンネルに掲載



<https://www.youtube.com/watch?v=IEjNxeyeIII>